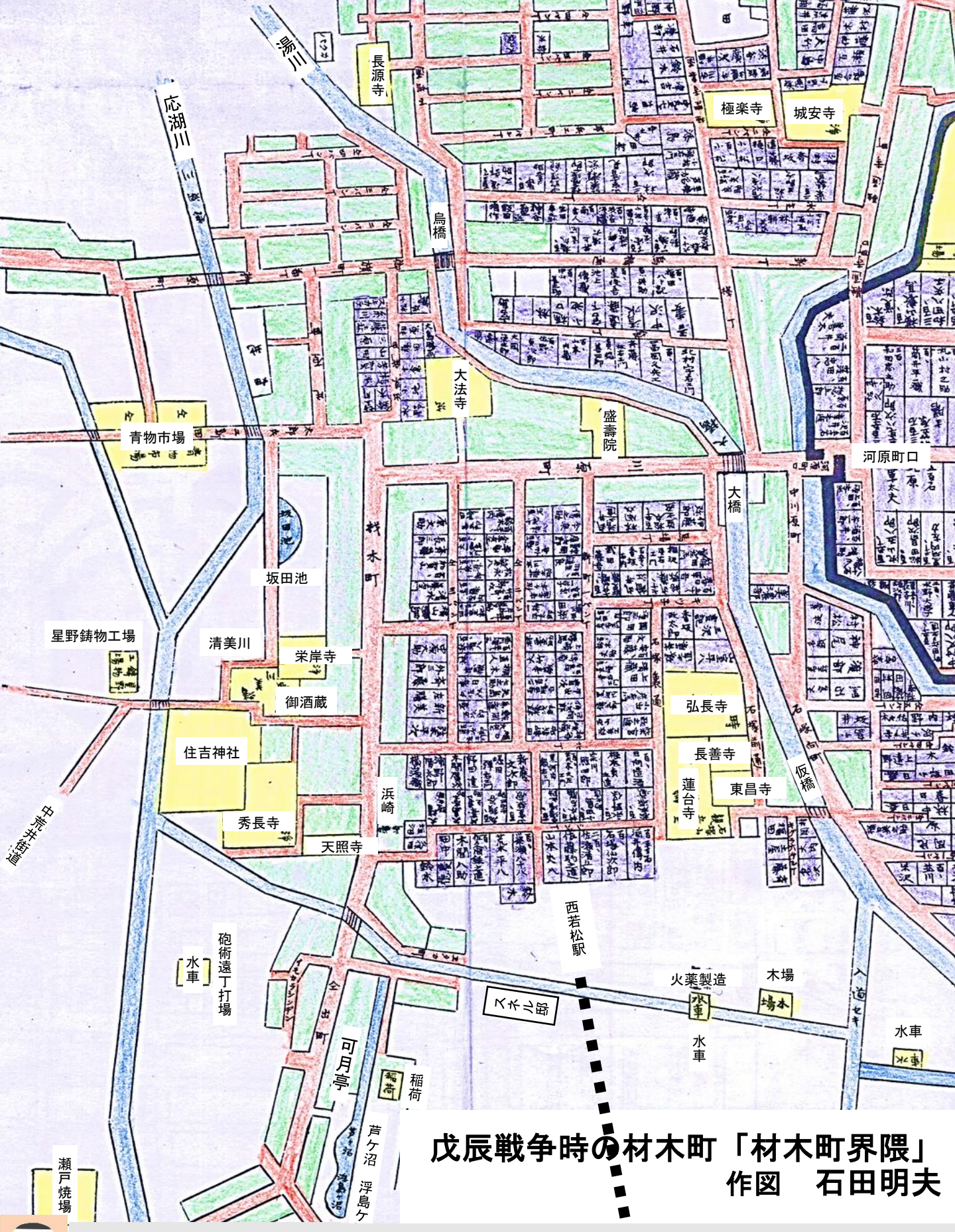

戊辰戦争時の材木町「材木町界隈」

作図　石田明夫

図・写真・文　©石田明夫　問合せ　Fax 0242-24-3423
メール・ホームページ「考古学から見た会津の歴史」で検索

材木町

江戸後期には、七十七軒の家がありました。南会津から材木を大川へ流し、本郷の向羽黒山城付近から分流した「応湖川」によって材木町へ流され、材木を扱う店が米代の西に集中していたのを慶長十四年（一六〇九）に移され町を材木町と呼ばれるようになりました。

柳土手

寛永八年（一六三一）の大洪水にきに、町の浸水防止のために約二キロ、高さ約三メートルの土手が築かれ、柳の木が植えられたことに由来します。

石塚観音

会津三十三観音十九番札所。一箕町の大塚山に館を構えていた大塚山氏が石塚に移り、石塚と名乗ります。天寿四年（一三七八）には、葦名直盛によって石塚山蓮台寺が建てられ、十一面観音が安置されます。蒲生秀行夫人、徳川家康三女振姫が深く信仰し、仁王門や鐘楼もありましたが、戊辰戦争で焼失しました。河原善左衛門の妻やす子は、八月二十三日母で白無垢姿の菊子と子の国子を連れ城に入ろうとしますが、西軍の進行が激しく、石塚観音で菊子はのどを衝いて自刃、国子はやす子の手で首が斬られ、葬られたのが焼けた鐘楼の場所だったという。

弘長寺・東昌寺

いずれも越後から会津に上杉景勝とともに移った寺。東昌寺は上杉景勝母仙桃院の菩提寺。戊辰戦争で焼失。

秀長寺の戦い

秀長寺は、慶長十年（一六〇五）に、蒲生氏家臣の町野左近が猪苗代から廓伝という僧によって建てられます。戊辰戦争、九月五日、西軍は西から大川を渡り、材木町の星野鋳物工場付近に進攻してきました。主力の薩摩藩軍軍監中村半次郎は、柳原から城下に入りました。星野鋳物工場にいた西軍を会津藩の佐川官兵衛、水戸諸生隊、会津藩砲兵隊約千人が待構え、西軍の背後を本郷の関山から来た朱雀隊と進撃退が鋏撃ちにしました。西軍は、四十人以上が戦死「狼狽上下混乱」し、砲弾や食糧、毛布などを放棄したのです。会津藩の戦士は一人で数少ない勝利となりました。

松平家四代目容貞（かたさだ）の母は、三代目正容（まさかた）から下げ渡された拝領妻と呼ばれ、笹原与五右衛門忠一の妻となります。笹原は離縁を拒否したことから三百石は没収されます。六十四歳で死去し墓が堂の裏にあります。

住吉神社

至徳元年（一三八四）、大町肥前左京守胤がと当時東西方向にあった大町の西端に勧請した神社。十日市の氏神です。

会津藩酒蔵「清美川」

江戸時代、家老の田中玄宰が、寛政三年（一七九一）十月、大坂から灘の杜氏、茂兵衛、庄七。麹師、清七の三人呼び、材木町に「清美川」の酒蔵をつくりました。

大橋

湯川に架けられた橋で、橋の大きさから「大橋」と呼ばれ、長さ二十間、幅四間、欄干がありました。戊辰戦争では、娘子隊がこの橋に集合しました。

可月亭

蒲生氏郷時代に南会津の下郷町楢原から移り住んだ材木商が先祖、星野家本家、鍋三（なべさん）の庭園。山水に水清く、自然の風向に富み、巧みに人工を施した林泉が特徴です。約千坪あり。幕府のお抱え庭師だった小堀遠州の弟子目黒浄定によって造られ、御薬園、覧勝亭と共に三名園とされています。庭には、「心字の池」があり、昭和七年の客間は、国の登録有形文化財に指定されています。

林家住宅

昭和二年に建てられた国の登録有形文化財。

スネル邸

プロイセン（ドイツ）出身のヘンリースネルの屋敷跡です。戊辰戦争で会津に来て平松武兵衛を名乗り、大砲を西軍に撃ちその腕前は正確だった。翌年、アメリカに約四十人を連れて移住しました。会津藩では、スネルから武器を買い、長岡藩も買いました。

図・写真・文 ©石田明夫 問合せ Fax 0242-24-3423
メール・ホームページ「考古学から見た会津の歴史」で検索